



イベント・シンポジウム等実績報告書 | 配分事業費：710千円

## 第6回SUAC&SPAC連携事業 現代劇上演とシンポジウム

### 目的・趣旨

今回はマレーシアのサン マレーシア大学の協力を得、「アジア文化圏内の亡魂の表徴」をテーマとした現代舞踊劇の公演並びにシンポジウムを本学講堂にて開催する。この意義は、SUAC&SPACの芸術及び学術事業に関わる2者連携に対して、さらにアジアの国際協力を得る事により、当該テーマであるアジア圏が共有する「見えない者」への探求に際して、その性質上、日本以外の国の研究機関の協力体制が成果を左右する理由による。

### 日時・場所

平成30年10月18日 静岡文化芸術大学 講堂

### 体制

(実施代表者) 文化政策学部 芸術文化学科 教授 梅若 猶彦  
(実施分担者) 文化政策学部 芸術文化学科 教授 立入 正之

### 共催・後援等

(共催) SPAC-静岡県舞台芸術センター  
(後援) 国際交流基金 (クアラルンプール)  
(協力) サン マレーシア大学

## 内容

パフォーマンス「Entranced2」（演出/出演:Aida Redza, 配役: 館野百代 (SPAC俳優) 大内米治 (SPAC俳優)、演奏: Eric N' Kaoua (ピアニスト, フランス)、照明デザイン: 本学学生音響パレション: Patch@Code, 運営のアドバイザー、備品調達、アーティスト対応等: 地域連携室)

【公演の概要と意味】演出家のAida Redza 女史が演出家として本作品の支柱となった事は、当該研究の実績の重要な部分を占めたといえる。女史は芸術を通してイスラム教圏内の女性の地位の向上を目指す活動家であり、時としてその作品は体制批判の表層を呈する場合もあるが、その支持者は多い。現、マレーシア財務大臣は女史のファンである。当該研究のキーワードである「亡魂」という概念は、学術的議論の俎上で、極めて対象物化しにくいのが、女史がMain Teriというシャーマニズムを提言し、さらにパフォーマンスに導入したことは、亡魂、疾病、出産と死（マレーシア出産時の死亡率が高かった事から出産は死と宗教的には合致した）、ダンス、物語性までも、それら全てが繋がったといえる。公演の演出として、舞台上には、それぞれ異なるデザインの椅子(30脚程)を客席に向けて配置し、それらに死者が座っているという前提の演出をした。天蓋として、白い布が吊られ、Main Teriの儀式様式に従ったようだ。ピアニストのEric N' Kaoua氏は、女史と選曲を協議し、敢えて東洋風の曲を選択することなく、バル、ドビュッシー、バッハ、ガーシュインという予想外なものであった。それらの曲とMain Teriとの相性は、期待の計算の外で合致したといえる。質疑応答で選曲の根拠と問われると、N' Kaoua氏は偶発的なものと答えている。シンポジウムでは、Gareth Richards氏(アジアの文化圏の境界線(意識))、Monica Alcantar氏(能の子方の原型(意識))、Hardy Shafii氏(Main Teri)の発表があった。Richards氏は東南アジア文化圏の境界線の3層構造及び生と死について、Alcantar氏は能の子方の基本的な役柄と機能(隅田川等)、さらに「子方を原型とする義経」の持論を展開した。Shafii氏はMain Teriの儀礼の解説をした。総括として高田和文理事が公演の批評を述べ終了した。



## 結果・成果

当該研究の理念である「独創的で高い学術性を備えた国際的に高い水準の研究、科学研究費補助金等の外部資金獲得に繋がる研究、全学的な見地から本学の研究水準を向上させる研究などの先進的研究」に足りる研究成果であったかは、自問せざるを得ないが、イスラム教文化圏内に、例外として現在でも存在するシャーマニズムは、学問的研究対象としては、マレーシア内部からのものはShafii氏が第一人者であり、研究対象としては認知されても、宗教的には邪教の部類に属するもので、背信行為とも捉えられる領域らしい。しかし当該研究のキーワードとなった亡魂は、このイスラム教以前の土着儀式に存在するのであり、Shafii氏のMain Teriの解説からも明らかになった。これはマレーシア大学との共同研究としても独創的な研究であったといえる。外部資金に繋がるものとしての根拠は挙げられないが、既に国際交流基金(ケアフルプール)や前出の大学から助成を受けてこの連携事業は成立した。